

兄弟が見たらどう悲しむことかと、だれも思わない者はありませんでした。

毎日の仕事は厳しくなるので、本当にちょっとでも休む暇がなく働かなければならんです。食糧が悪いといつもどんな物かというと、日本でいう雑炊に黒パンが一切れ、少々の副食という程度で、病人か何もしない遊び人でも不足という食事。これでは、とても体を保持することは大変無理なことで、それを毎日続けていたのだから生きているのが不思議なくらいで、栄養失調で死んでいくのは本当にかわいそう。夕食後いろいろ話をして一緒に寝て、明朝はもう冷たくなっているという状況です。それに慣れない仕事をしているので負傷者が続出し、中でも凍傷になる者が大分おり、本当にこの世の生地獄だったのです。

そのような苦しい状態を続けて、シベリアの春がやってまいり五月となりました。私も数人が分かれてチタの町工場に移動しました。その工場は総合工場で、木工場・旋盤工場・その他いろいろありましたが、私どもは鋳物工場で、そこから農場へも行ききました。そこには帰

るまでいました。

お互いに何の音信もなく、どうなったか分かりませんが、山の状況は本当に人間の生活とは言われない悲惨なものでした。

## 第二のふる里満州の記

静岡県 小松 さと

当時、若い人達の心を満州へ海外へと胸ふくらます雰囲気の社会的風潮だったと思います。私もその一人、黄道楽士の言葉に誘われるように親友三人と手を取りあい熱海駅より新京迄の切符四十二円何銭かで求め日本を後に満州へ、家族の反対、特に祖母は永久の別れかのように毎日なき続けられました。今、私はその当時の祖母と同じ年齢となり、祖母の心に詫びる気持ちです。

親友三人の道中で心強く、未知の大地への憧れと希望で一杯でした。玄界灘での船酔い釜山より汽車にて車窓より眺めたハゲ山の記憶、いまだに消えません。夜行列

車の疲れも感じず新京へと第一歩を踏み入れました。時は昭和十年五月中旬でした。

駅前の馬車、人力車の群れ、にんにく臭かった思い出、大和ホテルの庭の木々も緑に、そして一直線の広い道路等、四十五年も昔の記憶が残っております。右側は泉町、露月町羽衣町、次は忘れましたが蓬萊町、平安町、常盤町と碁盤の目のような静かな住宅街等、左側は商業区だったと記憶します。発展途上の街作りに驚きました。私ども三人は看護婦資格を持っておりましたので大歓迎されました。保健所の保健婦として勤め、渡満された人の中にも生活苦の家庭を民生委員とともに病気の相談相手として巡回致し感謝された事等、懐かしい思い出です。

十二年、人生の墓場と思っていた結婚生活に入り、主人転勤で新京より白城子を経て素倫という街へ、何時間乗りましたか大陸の平野を西へ西へと進みました。守備隊の小隊と少しばかり日本人がおりました。私達は満州国、種馬育成牧場が出来たばかりで町より四キロ程の地に官舎、それより四キロ奥地に牧舎牧夫の住まいが微かに見える程でした。

広大な牧場の中央を澄みきった川が流れ、来客の時は川より紅鮭を取り、野ではキジを取り大自然の中での生活でした。

七月には春夏秋冬の可憐な花が一斉に咲き乱れました。八月末には冷たい空気、九月には冬支度でペーチカの掃除です。草原のあちらこちらに蒙古人の家（ポウ）が点在していました。川の上流にハロンアルシャンという温泉が有りその奥にノモンハン事変の地があるとか随分と奥地と痛く感じました。

冬の訪れも早く辺地のため幼児を抱えた私どもは奉天に移り住み、姉弟が三人も在住していましたのと知人も多く心強く、気候も温暖でした。二女を育て賑やかな家庭となりました。又々新京転勤、此の地も知人も多く満州国ではの賑い、心の通いあう人達で幸福でした。懐かしい人達の顔が浮かんできます。内地は戦争で食糧事情も悪いとか便りに聞きましたが、何不自由のない生活、二男と二女と四人の子宝に恵まれ過ぎた生活でしたが主人が二十年二月、東満国境の図們街へ転勤となり、単身赴任しましたが、戦果も悪くなり新京は空襲が有ると四

人の子供を抱えて大変と七月二日に、又々長い旅をして家族全員図們へ居住する事になりました。荷物も解かぬ間に毎夜、空襲警報でした。不安な毎日でしたが日本は絶対負けないと信じておりました。

今、思うに負けた時の心の準備が皆無だった、大きな失敗でした。日ソ協定に安心していた事と報道が一方的だった事も満日本人の不幸を大きくした原因でも有ったと思います。九日暉春支店の婦人子供がトラックで着のみ着のまま、少々の食糧を持って到着でした。早朝より砲撃の音がするが日本軍の演習かと思っていました。そんな安易な心構えでいた事も私達と同じでした。今日は人ごと明日は我が身に、有るものは分け合い、助け合いましよと会社寮に落ち着いてもらいましたが、十三日満鉄関係の婦女子は全員南に向かい出発でした。不安も多くなり、私達女子、子供は十五日にトラック一台に乗り延吉へと一山越す事になりました。山越えの途中トラックの頭上を灰色の飛行機が飛んでいましたが、日の丸がないので、がっかりでした。

昼下がりに、延吉支店の寮に落ち着き、初めて十二時

に陛下のお言葉が有り日本の負けた事を知り、驚きと悲しみで号泣いたしました。不安は一層と大きく暗闇に落ち込んだ、そんな記憶があります。

翌朝、外は大騒ぎです。会社の倉庫の品々を満人、朝鮮人が奪い合いです。力の限りに荷物を運んでいます。日本人会社の物資は一瞬にて奪い取られました。内乱に戦争にと罪のない現地の人達の知恵の働きの早わざでしょう。それに引き換え、負けを知らない日本人はその日より悲惨な、いまわしい難民生活と変わったわけです。

十七日、大きな張り紙に（壁新聞）「日本は降伏した。但し治安は維持される民は安らかにせよ。」文面は記憶していますが政府の名前が何と書いて有ったか覚えておりません此の布告の日、日本軍が白旗を立てて延吉より図們に向かう事で主人は様子を見てくるといい軍使の列車で図們に向かいました。その夜の事です。日本人は焼き打ちされると流言で丘の上の師団の兵隊がトラックで危険を逃れるようにと迎えに街中を回って下され、四人の子供と持てるだけの荷物を持ち兵舎へと行きました。随分沢山の日本人が集まり、野宿となりました。八月と

は言え夜は冷え、野露を枕に眠れない不安の一夜でした。兵隊さん達が薄いおしるこをこれが最後のご馳走ですとの好意に涙ながらに戴きました。

一夜明けた結果、焼き打ちは有りませんでした。それぞれ帰宅せよとの事、会社の社宅へと配分され、ひとつ屋根のしたに三家族位の同居です。兵舎から社宅まで、何程歩きましたか長女は七歳、リュックで自分の荷物丈は持ちましたが、四歳の次女は少々の荷物、私は重いリュック、その上に長男二歳、胸に次男を抱えて牛のように足は進まず困難しました。

とにかく、布団丈は買い求めましたが食糧からの心配、会社の倉庫は空っぽです。漸く主人が凶們より帰ってきましたが、知人の方々の悲惨な話ばかりです。一か月半の凶們生活でした。親しく交際しておりました満銀の支店長様御夫婦と子供様の四人家族揃って防空壕の中で自殺しておられお気の毒でした。住居の後は荷物何一つ無く本が散らばり写真ブックだけが有ったので我が家の在満の思い出の記録が残りました唯一の宝物です。駅前には日本兵が十五日の終戦を知らず戦い戦死しておりまし

た姿を見て、ただ無残な凶們の様子の異常だった結果を見てまいりました。それから社宅での寄り合い生活が、先の見えない不安の中に始まりました。

九月も末のある日、突然八路軍が来て此の社宅は将校官舎になる。お前たちは一時間以内に出発せよとの命令です。そして安全な場所に案内するといいました。難民生活二か月目、乞食に等しい引越です。多勢の人達が行列です。着いたところは囚人が逃亡した空き家の刑務所です。真ん中に広い廊下、両側に個室、三丈間位、泥の床、小さい窓、ドアは厚かった様に憶えています。刑務所生活とは考えてもおかしな話です。どの家族も持ち物も少ないのにダバイは続き、毎夜息をひそめて夜明けを待つ、そんな不安の中に又々大変な事が始まりました。どこの部屋からともなく呻き声です。風呂にも入らず洗濯すら思う様にできない為、シラミの攻撃で発疹チフスが流行して来たのでした。高熱にうなされた、その呻き声は墓場の近づきを、ひしひしと感じました。あの部屋もこの人も毎日毎日、冷たくなった知人を此の哀れな刑務所内で送り出しました。

両親を無くして子供様が残され唯一人、日本人同志が引き取って育てられない無慈悲な様でしたが明日は我が身が、ぞっとする毎日が続きました。

十月末、寒気も強く此の冬をどうして子供たちを生き延びさす事ができるだろうか、只々一日を過ごす事で、明日一日無事に過ごす事で精一杯でした。かわいそうな子供様は満人に貰われて行くのを見送るだけでした。満人がこう話しておりました。「日本人、気の毒。日本人、心で頂好、竹を割った心の持ち主ネ。子供大切にするヨ」と此の言葉、今も耳の底に残っております。日本に傷つけられた人達がこうした言葉で、孤児を引き取って行きました。

十一月、外の寒気もひどくなり、只一つ有るつるべ井戸は氷り付き、その周囲は氷で足をすべらせながらの水くみでした。心も身も冷たいある日、乞食の子供よりもひどい顔の裏も表も見分けのつかない、衣類はポロポロ、麻袋をかぶり百何十人かの少年が着いたのです。此の悲惨な姿の少年達、十六歳か十七歳の国策に従った開拓義勇少年隊でした。収容されてもひどい栄養失調、口さえ

思う様に話せない程、弱り切っていました。此の一隊も毎日、三人四人と発疹チフスに侵されて亡くなって行くのです。毎日悲しい事のみでした。刑務所内に居住する人達はすべて難民でした。とても此の少年達を引き取る事はできず哀れに見守るだけでした。或る日、私どもの住まいの前に寒さに震えながらお湯を下さいと一人の少年に出会い言葉を交わしました。同県人だったので。島田市生まれの十五歳の少年でした。あまりの哀れきで家族の食事事も事欠くほどの状態で部屋は三畳位でしたが、どん底生活ながら苦勞をとにも分け合うことで引き取り同居いたしたのですが、その日から高熱をだし発疹チフスとなり狭い中で家族に感染してはと心配いたしました。が誰も感染することなく少年も全快して不幸中の幸いでした。

十一月、ますます寒気も厳しくなり、このままでは全員死んでしまうのではと心痛める毎日でした。私がかつと門外に出られる日がありまして、間島省庁の前まで来た時に一人の御婦人とめぐり逢えました。胸に相磯と書かれた名札を付けており、思わず郷里はどちらと尋ねま

した処、熱海市小山ですとの事。主人のお名前はと聞いて驚愕、同郷の一年先輩の方の奥様、早速、相磯様にお目にかかり、狭い家ですが、引っ越して来なさいとの好意にどんなに嬉しかった事か形容する言葉のない感激でした。今なら考えも付かない、あの一部屋へ私ども家族六人、義勇隊の少年、相磯様家族四人に一人の義勇隊の少年。あの時の思い出は地獄で仏様にめぐり会えたところでも、いや永久に忘れる事は出来ません。

十二月、二十年も暮れようとしたある日の刑務所より解放された日の記憶です。十二月三十一日、お餅も無いコーリヤンの雑炊の歳末、外は大雪でした。故郷の話に苦しさを紛らわし夜も更け、その時です。助けて下さいと戸をたたき音、何か悲壮な声に何事かと聞きますと、今日捕虜から解放されましたがこの大雪と寒さに行く先も無く、今晚だけ泊めて下さいと、その言葉に余りお気の毒で私達の現状を話し、コーリヤンの雑炊の馳走で暖まって戴き、元旦、雪の中を重苦しい別れを致しました、が無事家族の処に帰り着きましたか途中、凍死されたとかの噂も耳に入りましたが何の力も無い私共だった事が

残念でした。あの時せめて日本の住所なりと聞いておけばよかったのに。自分達の生活で精一杯の時は頭の回転も悪くなるものでした。

漸く三月、少々暖くなり始め男子は軍隊の使役で毎日かりだされ無償でした。それでも帰りにコーリヤンの残飯をたくさん貰ってききましたので飢えをしのぐ事は出来ました。女子はソ連軍が勝ち取った日本軍服の衣服の洗濯です。ポンプは油切れで力一杯を振り絞って一日何円かの収入です。それでも収入は有り難い事でした。

四月、子供達は外へ出て喜ぶ日々となりました。男子は昼夜使役にとかり出されておりました。四月八日夜、今口はお釈迦様の誕生の日、故郷では、お寺様でお花を飾り甘茶をかけて甘茶を呑んで楽しい御祭りの日、思い出話をしておりました。その一瞬の出来事です。三歳の誕生を迎えたばかりの長男が当時、日本軍の残した弾薬をソ連へと積荷して外に散々と落ちていたその一個の爆発のために悲惨な一大事が起こったのです。幼い紅葉の様な指は飛び散り、眉間からは血が吹き出ているのです。部屋中、血の海です。泣き叫ぶ幼児を抱え余りにも悲惨

な状態に手の施し様もなく只、泣き叫ぶ幼児を胸に抱き命だけはお助け下さいと心に祈りながら夜明けを待つのみでした。日本人の医師は誰一人と無い現状でした。悪夢の夜も白々と明け尋ね尋ねて、やっとの事、八路軍の病院に頭を幾重にも下げて手術をして戴きましたが、右手首よりの切断でした。あの時の悲嘆に暮れた私共家族相磯様の御家族共々に生涯忘れる事は出来ません。敗戦の傷跡はこの長男の不幸を親として一生涯、胸の痛む思いです。忌まわしい痛恨の事は今も生々しい思い出です。子供達四人栄養失調も進み、七月頃よりあちらこちらにジフテリアが流行してきました。末の次男が、とうとう感染してワクチンも医者もなく悲しくも延吉の地で亡くしてしまいました。やっとなんと薪をかき集め茶毘にいたし、お骨だけは持ち帰りましたが口惜しい結果でした。

七月頃より日本へ帰れると耳にいたし、心踊る思いでした。順番待ちとか、漸く八月二十五日出発と定まり数少ない荷物と重要書類、預金通帳、保険証書等大事に駅前迄集合いたしました処ですべて取り上げです。東満地区はずいぶん嚴重だったと聞きます。延吉駅より貨物列

車の箱の中に入り、何れ程進み何処へ着くのか只命令のまま。老爺嶺の麓で降るされ、それより峰へどれだけ登りましたか。トンネルの入り口で一晩野宮です。多分老爺嶺駅かと思えます。それより乗車の貨物列車は皆、無蓋車でした。やっとなんとトンネルを出まして吉林省の広大な平野へと出ました。又々吉林かと思ったとたん降ろされました。貯炭場跡石炭の粉塵に悩まされる事三晩ほどの野宮とでも申しますか。吉林出発、何日たったのか記憶に有りません。無蓋車の最後の汽車の旅でした。夜明け頃新京の街を通過でした二度も住んで楽しい思い出の街を懐かしく悲しく胸の痛む思いで眺めました。雨が降れば濡れ、急停車すれば誰かが列車から転げ落ち運転が何時間も止まりますと皆で、お鍋を出してご飯を炊き、焼お味噌か何かでの食事を取り、勝手な口は一言たりと話すことは出来ません。漸くの事、何日かかりましたか奉天駅に列車は着きました。何十本と日本人の引き揚げ列車が奉天へと向かって到着したのですが下車出来ません。愈々到着した街は錦州という街です。ここは共產軍と国軍が激しく闘った地でした。鉄骨の建物の屋内は破壊

されたが、雨だけは凌ぐことが出来ました。毎日炊事班  
が大きな支那鍋でコウリヤンを炊き食事です。幼い子供、  
老人は腹痛、下痢に悩まされておりました。建物の周囲  
は垣が廻わされて、その外側に満人の焼芋おいしい香り  
をさせて、焼芋一つ子供たちに買い与えるにも道中用意  
したお金も乏しく子供の一枚残しておいたセーターを売  
り、買い求める、そんな哀れな日々でした。一日も早く  
日本へ帰らなければとそれのみ望む毎日でした。

夜はこの建物の中での集団生活のわびしさで心の慰め  
に演芸会です。浪曲や流行歌に耳の底に残る哀愁の歌、  
異国の丘の歌詞、誰か故郷を思わざる、望郷の念に胸さ  
される思いで聞きました。難民生活のわびしさ、迎えるの  
船も少なかったのでしょうか。二週間程の集団生活、漸く  
乗船の番が来ました。

十月十二日コロ島へ子供の手を引き胸に次男の骨箱を  
抱き、一年間の難民生活荷物は着古しのポロばかり重い  
足に軽い荷物、栄養失調ながらも無事連れて帰れる尊い  
子宝を何よりも力強く、岸壁に日の丸の船体を見た時、  
日本からの迎えが来た、これでやっと故国に帰れる乗物

と胸一杯の感激で涙がとめどなく流れました。口々にこ  
の冬を満州で越したなら日本人の半分は生きて帰れない、  
それ程に生きて帰れる喜びでした。今、静かに振り返り  
希望に満ちた青春時代の終りだったあの日、あの時、敗  
残者として故郷へ帰るその日だったのに。思えば人生一  
生涯の中の短い歳月だった在満生活、私の胸中に張り裂  
ける程の思い出が残っています。大陸生活のためか、お  
おらかな人達との心の触れ合い、温かい交際、肉親同様  
に助け合い数々の思い出で胸の熱くなる第二のふるさと、  
満州です。敗戦後の苦しかった生活、子供たちの不幸等、  
胸の凍る思いも一杯ですが、悪夢として忘れ去りたいと  
思い、懐かしい思い出は大切に胸の中に抱いておきたい  
と思います。

十月二十五日、博多港へ上陸、DDTの消毒、千円札  
一枚の小遣いを貰い故郷へと汽車の旅。第三の人生のや  
り直し、それは引揚者の人達と同じ苦しみだったと思い  
ます。子供の成長に、生活の安定にと無我夢中の三十五  
年間、現在三人の子供達それぞれの道を確かに、しっか  
りと歩いています。



私も人生の終りに近づきつつ、第二の人生を求め歩いた若い日の尊い体験は生涯、私の脳裏から焼きついて忘れ去ることはないでしょう。

再び訪れることの無いふるさと、短い期間だったが書き尽くせぬ程の長い旅路でした。

## 我が家の敗戦体験

北海道 池田 幸次郎

ソ連の参戦と満州の占領

拳銃の射ち方を妻に教え、万が一のときは子供と二人で死ぬのだ。このあたりの陸軍官舎はもう人影は見えない。居抜きのままの空家になっていた。

昭和二十年八月九日、満州の主要都市を爆撃、ソ満国境を突破したソ連軍は進撃を始めていた。

その日の朝、突然の命令で軍関係および満鉄の家族は、本日十二時〇分の列車で日本に帰還せよ、持ち物はトラシク一個。

当時、子供はハシカのと消化不良を起こし、往診の先生は母親の血を太い注射器で腹の上から腸に注入したりして危険な状態であったことから、帰還列車に乗せなかったのである。何組かこのようにして残った家族は、暴民が空家を襲うことを考え、数日後に役所の地下へ収容された。

そのころ、ソ満国境付近の日本人住民は、列車もトラックもなく現在のようにバス・マイカー・タクシーなど是一台もない時代、徒歩で逃避行を続けていた。背中には大きな子供を、前には小さな子供を背負った母親・老人・体の悪い人など、どのくらい歩けるでしょうか。

入院中の人は殺していってくれと言われ、注射で処置をしたと引き揚げた病院の先生は言っている。歩けなくなった人は子供を満人に預け、また、集団から遅れた者はそのまま置き捨てられた。その人たちはどうなったかは当時知るすべもなかった。満州の孤児は皆それである。死亡・不明者の数々を出した。

関東軍司令部からは防戦の命令はなぜか出されなかった。一部では防戦をした部隊もあったという。なぜ、そ